

意外にも美食家だった シャーロック・ホームズ

イギリスの小説に登場する人物の中で、最も有名な三人といえば、ロビンソン・クルーソーとレミユエル・ガリバーとシャーロック・ホームズだそうである。

そのなかでも特にシャーロック・ホームズは少年少女から高齢者まで愛読者が多いようだ。彼は一八五四年一月六日にイングランド北部のヨークシャーに生まれたという。

そして一八七四年の「グロリア・スコット号」の事件を皮切りに、第一次世界大戦直前の事件「最後のあいさつ」まで、大小合わせて六十編の記録が残されている。

その後サセックス地方に引退して悠々自適の生活を送ったが、熱烈な愛好家（シャーロック・ホームズまたはホルメジアンという）は、いまでも彼は生存していると固く信じているそうだ。

さてホームズといえば食べ物にはあまりこだわらず、粗食に耐えたというイメージが強いが、決してそんなことはない。

特に「ローストビーフ」が好物だったようで、「瀕死探偵」事件解決後には、ワトソンをシンプソン（ローストビーフで有名な、ストランド街のレストラン）に誘っている。

他の作品でも食事についての言が見られる。

ここに面白い本がある。



ホームズ家の料理人だったサラ・ハドソン夫人の料理ノートをもとにしたという設定で、フアン・クラドックが著した『シャーロック・ホームズ家の料理読本』である。

彼女はホームズ物の全作品を調べ、料理に関する引用を拾い集め、さらにヴィクトリア朝全盛期の料理書なども参考にして、二百三十七種類のホームズ好みのレシピをエピソードを交えて紹介している。

ちなみにホームズはヨークハムの料理が特に好きだったようで、肉料理のトップに掲載されている。

こんな本が出版されるのはいかにもイギリスらしく、わが国で明智小五郎や金田一耕助の「料理読本」が出るとはとても考えられない。